

研究概要報告書【音楽振興部門】

(/)

研究題目	アメリカおよびイギリスの作曲家による芸術歌曲作品の研究と演奏	報告書作成者	辻 由美
研究従事者	辻由美（活動名:佐竹由美）		
研究目的	<p>日本での音楽界において、これまで英米歌曲の分野で演奏される作品は、ごく限られたものにすぎなかった。音楽教育の分野においても、一時代前は英語の発音による発声の弊害があるとされ、教育の課題からは排除される傾向にあった。したがって、英米歌曲の認識も発展も、日本においてはほとんど見られることがなかった。</p> <p>筆者が 1985 年にヨーロッパに留学した際、サミュエル・バーバーの歌曲作品が講習会で取り上げられ、それ以来英語のテキストを持つ作品に対し魅力を感じ、アメリカ歌曲を取り上げて研究・演奏を行ってきた。</p> <p>2002 年東京藝術大学大学院後期博士課程に入学するにあたっては研究テーマとしてアメリカ 20 世紀芸術歌曲を取り上げ、研究演奏を行った。博士論文として「アーロン・コーブランドの《エミリー・ディキンソンの 12 の詩》—「アメリカ的」なるものの考察と作品分析—」を研究目的とした。</p> <p>昨今では、日本においても徐々に英米作品の価値が受け入れられ、演奏を希望する生徒や演奏家も増えつつある。現に東京藝術大学では大学院特殊研究の授業として英米歌曲が 2004 年度から開講され、その授業の受講を希望する学生も増えている。筆者は前任の教師よりこの講座を 2009 年より引き継ぎ指導しているが、日本の音楽教育界において、まだまだ発展途上である英米歌曲の地位を確立すべく、この分野の研究・演奏を行っていくことを研究目的とした。</p> <p>以上の理由で 2009 年(平成 21 年)より英米歌曲シリーズを企画し、コンサートを開催している。</p> <p>第 1 回公演(平成 21 年 9 月 28 日)では、アメリカの詩人エミリー・ディキンソンとその詩に魅せられたアメリカの作曲家 A.コーブランド、J. デューク、R. バクサ、L. ホイビーを取り上げた。また第 2 回公演(平成 22 年 10 月 20 日)では、生誕 100 年の S. バーバーと G.C.メノッティを取り上げた。</p> <p>第 3 回(平成 23 年 11 月 2 日)は、続けて S. バーバーと、生誕 100 年の G.C.メノッティを取り上げ演奏を行った。</p> <p>今後は、シェイクスピアの詩をテキストとして作曲された多くの作品や、20 世紀後半に活躍したバーンスタイン、アイヴス、ローレムなども取り上げ、引き続き演奏を通してダイナミックかつ柔軟で繊細な部分を持つ魅力的な多くの英米歌曲作品を紹介し、英語の歌曲の普及に努めながら研究演奏することを目的としている。</p>		

研究内容	<p>英米歌曲シリーズ第3回目のテーマは、「続G. C.メノッティとS. バーバー」と題し、生誕100年を迎えるG. C.メノッティとその友人のS. バーバーを取り上げた。</p> <p>バーバー(1910-1981)とメノッティ(1911-2007)は、1歳違いでカーティス音楽院で学び、学生時代から行動を共にしてきた。</p> <p>その後共同で1943年にニューヨーク州の山の中にカプリコーン荘を購入し、ここでの共同生活の中で数々の代表的な作品が生み出された。それらの作品の背景を知るべく、まずはこのふたりの生涯の出来事と作品発表年を年表にしてみた。(プログラム参照)</p> <p>この年表から、バーバーとメノッティは、出会ったときからお互いに大きく影響し合い、ほぼ同じバイオリズムで作曲家人生を過ごしていることが見て取れる。</p> <p>今回取り上げたプログラムは、絶頂期にあったふたりの作品と、ふたりの関係が微妙なアンバランスを生み始めた時期の作品に焦点を当てた。</p> <p>【プログラム】</p> <p><u>数々の賞を受賞し、絶頂期であった頃の作品として</u></p> <p>Gian Carlo Menotti: Monica's Waltz from "The Medium" (1945年作曲) モニカのワルツ オペラ『霊媒』より</p> <p>Hello! Oh, Margaret, it's you from "The Telephone" (1946年作曲) まあ、マーガレット、あなたなの オペラ『電話』より</p> <p>Samuel Barber: Knoxville: Summer of 1915 Op.24 From James Agee, 'A Death in the Family' (1947年作曲) 「ノックスヴィル:1915年の夏」 作品24 ジェームス・エイジー『家族の中の死』より</p> <p><u>1966年ふたりの別離を迎え、心の苦悩や葛藤などの内面的表現が表れている作品として</u></p> <p>Gian Carlo Menotti: "Canti della Lontananza" 「遙かなる歌」全7曲 (1967年作曲)</p> <p>Samuel Barber: "Despite and Still" 「それでもなお」全5曲 (1968年作曲)</p>
------	---

研究概要報告書【音楽振興部門】

(/)

<p>研究のポイント</p>	<p>メノッティとバーバーは互いに影響し合い、ほぼ同じバイオリズムで作曲家人生を過ごしていることに焦点を当てた。 メノッティは自作の台本や詩をほぼ自分で手掛けているが、「遙かなる歌」には、ニューヨークを去ったバーバーに対する複雑な、一種女性的な心理が綴られてる。また、バーバーの「それでもなお」作品 41 には、それまで順調だった作曲家人生において、初めての公演失敗という挫折を味わったことによる作曲不調に対する自身の憤り・焦りを感じとることが出来る。 これとは対照的に、絶頂期にあったふたりの作品には、音楽が外へ外へと開かれて表現されていることが感じられる。 これらの背景を踏まえ、メノッティとバーバーのそれぞれの作品の分析を行い、彼らが表現したかったであろう詩と音楽の融合を演奏によって表現することを目的とした。</p>
<p>研究結果</p>	<p>メノッティとバーバーの「陰」と「陽」の作品を通し、心の変化や描写を感じ取ることが出来た。それは人の一生にも通じて誰もが持っている共通の感情であろう。 メノッティは、常に聴衆に「優しい」「理解しやすい」作品を目指していたが、晩年の作品にはむしろ複雑な和声やリズム、それとは対照的に極端にシンプルな音を使っての静けさの表現などによって、彼自身の作による内面的な、また抽象的な内容が描かれていることが分かる。 同じくバーバーも、流れるような叙情的なメロディの美しさで聴衆はもとより多くの名歌手達を虜にしてきたが、晩年作品には音楽的な精神の深さの表現がリズムやメロディに見られ、和声の独特の複雑さが晩年の作品の特色となっていることが分かった。 しかしながらメノッティもバーバーも、「声」という人間の持つ独自の神からの贈り物に対しこれを深く敬い尊重し、その上でダイナミックでより人間的な表現を求めていたことは作品からも読み取ることが出来る。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>引き続き、英語の詩による歌曲作品を取り上げ、作品分析を行い、詩と音楽の融合、表現を求めて行きたいと考える。 と同時に、英語での歌唱という点で、より明確にその技術的歌唱方法を探求していきたい。 次回取り上げる課題として、「シェイクスピアの詩による歌曲作品」を考えている。 シェイクスピア作品の中の詩は、クイルター、アーゼントなど多くの作曲家の歌曲作品として取り上げられている。 その理由と作品の魅力について、考察していきたい。</p>

早くから才能を開花させたメノッティ（1911年イタリア・ルガーノに生まれ。父の死後母と共に渡米、1928年フィラデルフィアのカーティス音楽院に入学）とバーバー（1910年3月9日ペンシルヴァニア州ウェスト・チェスター生まれ。1924年14歳でフィラデルフィア・カーティス音楽院の最優等クラスに入学）は、カーティス音楽院で共に作曲家スカレーロに師事し、生涯親密な友人として、音楽的にも精神的にも支え合い、影響し合いながら作曲活動を行ってきた。

その軌跡を年表にしてみると、面白いことに、ほぼ同じバイオリズムで作曲家人生を過ごしていることが見て取れる。

今回のプログラムは、ふたりの絶頂期と離別期に光を当て、研究演奏に取り組んだ。

1943年にふたりは共同生活を開始。その後メノッティは、オペラ『霊媒』（1945）、オペラ『電話』（1946）と親しみやすく理解しやすい題材を取り上げ、立て続けに大成功を収める。一方バーバーも、ジェームス・エイジャー（1909-1955）の『ある家族の死』の郷愁的な散文詩に強く魅かれ、作曲を試み成功を得る。バーバーによるエイジャーの言葉の描写には、音楽的な言葉選びが沢山使われており、絵画的で感情的表現に富み、広大な自然や風景が音の広がりを持って表現されている。

この頃のふたりの作品には、音楽が外へ外へと開かれていくような華やかな音に彩られており、また、音楽と聴衆との関係の良好さも見て取れる。

その後ふたりは、アメリカで最も権威のある「ピューリッツァー賞」を相次いで受賞。台本作家としても才覚を表したメノッティは、他の作曲家のためにはほとんど台本を書かなかったが、バーバーの作曲したオペラ3本の台本はすべて手掛け、特に1957年ヴァネッサ《Vanessa》は、先に述べたピューリッツァー賞を受賞している。

しかし1966年頃からのバーバーの作曲家としての不調により、ふたりの関係のバランスが崩れ、共同生活を解消。

メノッティの歌曲集「遙かなる歌」（1967）は、一度は深く愛した人が他人へとなくなっていくことへの別離と喪失感が描かれており、悲しみに満ちた表現や、感情を吐露するようなドラマティックな表現が見られたり、終曲では全ての感情を超越したかのような成熟した静けさが表現されている。このメノッティ自身によるテキストは、親友バーバーが彼のもとを去り隠遁生活に入ったことへの応答として書かれたとも言われている作品である。

一方、バーバーの「それでもなお」作品41（1968）は、その旋律は知的で声楽的にも挑戦的なものであり、難解なテキストをドラマチックな描写によって描かれている。19世紀後半ドイツロマン派との類似点がある半面、20世紀のハーモニー言語の束縛のない音を使用、バーバーの円熟したスタイルの二面性を持ち合わせており、人生のより深い世界へと理解を求められるような作品になっている。

このように、晩年のふたりの作品には、より内的な表現へとベクトルが向けられ、人としての豊かな想像力と深い表現が求められる作品となっている。